
転生

逢月 裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生

【Nコード】

N4918R

【作者名】

逢月 裕

【あらすじ】

“ 僕らはいつでも一緒だった。生れ落ちた場所も育った時間も、そして輪廻の行く先も。僕らはいつまでも一緒だった。” 不思議な関係を持つタクト・ヒロエ・ナナコの3人。その力で転生を続けてきた。でも、その関係が崩れるとき…それは決して互いを傷つけるためではなかった。

1 (前書き)

小説としてタブーかと思いますが、会話と説明文の名前表記が異なります(カナ・漢字両方使用)。ただ、これはどうしても作者の思うところがある部分なので、ご了承ください。

1

“ 僕らはいつでも一緒だった。

生れ落ちた場所も

育った時間も

そして輪廻の行く先も

僕らはいつまでも一緒だった。”

明けきらない朝。

ヒロエはその時間が好きだった。

目覚まし時計をかけているわけではないのに、決まってヒロエは目を覚ました。

まだ闇の残る部屋がぼんやりと輪郭を持ち、朝日が徐々に差し込んでいくさまをじっと見るのが好きだった。

明けきった後は惰眠をむさぼる。

他の二人はまだ寝ているからだ。

やっとコトコトと部屋の外で人の動く気配を感じて、ヒロエはやっとベットを降りる。

「おはよ。浩衛。多久兔。」

台所に立つナナコが朝日を背に、ヒロエとタクトに声をかけた。

丁度、向かいの部屋から出てきたタクトは、不機嫌そうに一瞥をす
るだけでそのまま洗面所へと向かってしまった。
相変わらずのことなので、ナナコもヒロエもあえて何も言わない。

「おはよう。七胡。」

「今日の朝の目覚めはいかが？」

「うん。なかなかよかったよ。今日は寒くなりそうだね。」

ナナコは朝食の準備を続ける。最近はや食好きということもあって、
朝食はいつも立派だ。

ご飯、お味噌汁、卵焼き、焼き魚。

昨日の残りのきんぴらも添えて、テーブルセットが完了したときには
不思議とタクトも席についている。

幾分、すっきりとした顔立ちだ。

3人で囲む朝の食事。

ずっと続いている、ヒロエたちの習慣だった。

食事中はしゃべることはほぼない。

カーテンのないすりガラスから差し込む朝日を3人で浴びて、暖か
なご飯をゆっくりと食べる。

それが1日の中で一番確かなことで、一番充実した瞬間だった。

「今日から、私たち高校に行くんだよね。」

ナナコがいう。

「うん、そうだよ。」

ヒロエは答える。

「もう高校生なんだね。私たち。」

「うん、そうだね。」

「時は早いね。」

「うん。あ、多久兔。」

「・・・なに？」

ゆつくりとタクトは顔を上げる。

「口に、ご飯ついてる。」

ヒロエの視線の先を狙って、タクトは右端の口元を手で触る。

わずかにずれている。

タクトはあとわずかなところでそれに気がつかない。

ヒロエが手を伸ばし、それをとってやった。

きめ細かな肌と人よりも高い体温が、ヒロエの指先にわずかにふれた。

タクトはヒロエの指先につままれたご飯粒をみても、結局また何もいわず味噌汁をすすった。

ヒロエも何もいわない。

つかんだご飯を自分の口に持っていき、食べてお茶をすすった。

すする音が、朝日の中に浮かぶりビングに響く。一番確かなことで、一番充実した瞬間。

1 (後書き)

誤字・脱字があればお知らせください。

2

初夏の香りがした。

帰り道、ヒロエと一緒にいる友人はいない。

タクトもナナコも帰りは一緒ではない。

ヒロエは1人で家路に着く。

玄関を開けると、家にはまだ誰もいなかった。

朝とは打って変わった静けさと、夕闇に包まれたダイニング。

電灯をつけると、息の絶えたような空間がそこにはあった。

自室に入り、着替えを済ませると洗面台で顔を洗う。

やけにその音が大きくて、ヒロエの心がざわついた。

廊下を歩いていく音が聞こえた。

顔を上げると、鏡越しにタクトがヒロエの後ろに立っているのが見えた。

ヒロエは「おかえり」と声をかけた。

タクトは澄ました顔をして、ヒロエを見た。

「ただいま。」

「ナナコは？」

「知らない。」

ヒロエが洗面台から離れタオルで顔を拭く。

その間に、タクトも手と顔を洗った。

他人が奏でる音だけで、心のざわつきは消える。

「貸して。」

タクトが濡れた顔を向けて手を伸ばした。
切れ長の目が、ヒロエの瞳を捕らえる。

ヒロエがタオルを渡すと、その影に隠れて捕らえていた視線はふいに途切れる。

まるで陽だまりが雲の影に隠れてしまったかのような、寂しさがヒロエに残った。

ナナコは夜遅くに帰ってきた。

「今日は、おばあちゃんのところ行ってきた。」

ナナコが大根の味噌汁をすすりながらヒロエに言った。

「急だな。」

ナナコは週に1度祖母の家に行く。

この家から電車で3時間ほどのところにナナコの祖母の家がある。
以前は週末に行くことが多かった。だが最近は今日のようにふらっと行ってしまう。

「うん。そうだね。学校終わってから時間余ったから。タクトは？」

「部屋。」

「そ。」

短い言葉を残して、ナナコは食事を続ける。ヒロエはナナコに付き合って黙ってテレビを見た。

テレビは、イジメによって自殺した少年のニュースを女性アナウンサーが神妙な面持ちで告げていた。

そして、また朝が来る。

3人で食卓を囲み、ナナコの作る味噌汁を飲む。

タクトが先に家を出で、ヒロエとナナコはその後を追った。

同じような日常。

何年何十年そして何億年と続いた3人の日常。

時代や場所が変わろうとも、3人はいつも一緒だった。

生れ落ちた場所も

大地へ眠りにつくときも

そして輪廻の先もまた

ずっと。

そう信じて疑わない。

「なあ、浩衛。」

クラスメイトの1人が真剣な面持ちで声をかけてきたのは、入学から2ヶ月と3週間と17日のことだった。

それは、2ヶ月と3週間と17日、3人が同じ穏やかな日常を繰り返してきた時のことだ。

「お前、同棲してるって本当か？」

「何。急に。」

ヒロエはその生徒の名前を思い出せない。

「うわさになってるぜ。毎朝一緒に来てる女の子だよ。ナナコちゃん？お前の彼女か？」

「違うよ。」

この生徒は誰だろうと考えながら、ヒロエは答えた。

「でも同じところに住んでるんだろ？」

「・・・違うよ。俺たちはただ・・・一緒に生きてるんだ。」

その言葉の後に、その生徒は次の質問をしてこなかった。

別の音がヒロエたちの会話を遮断したからだ。

ガシャン・・・ッ

それは1つ上の階での出来事だったけれど、ヒロエのクラスにまで響く音だった。

教室の誰もが窓際により、上の階を見上げた。

ヒロエもユウマも少し離れたところからその様子を見ていた。

「何だ？何かが、降ってくる。」

「ガラスだよ！おい、離れろ！」

「違うよ・・・これ・・・雪？」

窓から身を乗り出した女子生徒がそういった。

それは、チラチラと太陽の日差しにきらめいて舞い降りる。

ヒロエはそれが何かわかった。

『福音の色』

それは、決して目に見ることのなかったタクトの“力”。
繊細で、決して人を傷つけない。

タクトはヒロエとは違う。

そう、正反对だ。

タクトは、他人の心をすぐに察知する。

そして“力”の使い方も、タクトはよくわかっていた。

タクトは冷静に判断する。

どんなときも、何が最善かを見極める。

それを表現するための言葉を用いないだけ。

だから誤解される。それをタクトは別段気にはしていなかったが。

そう、タクトは静かなる月だった。

割れた窓ガラスが、雪となって降ってくる。

6月。

雨の季節がもうすぐ終わる。

季節はずれの雪。

だれもがその雪を見た。

悲しいほど真っ白な雪は、積もることなく一瞬の虹のように、何かを心に落として消えた。

その日、タクトもナナコも、家には帰ってこなかった。

3

朝起きると、ナナコは朝食を用意していた。
今日は珍しくパンを焼いていた。

「おはよう。」

「おはよ。」

短い挨拶の後、タクトがやってきて席に座る。
ヒロエはタクトを見やる。

変わらない。それでいて何かが違うような。

ナナコがバターをぬったパンを、タクトに渡す。
なんでもない日常。

ヒロエは黙って朝食に手をつける。

そう、“なんでもない日常”。

日差しは普段どおり3人を包み、朝の雰囲気がある。

「今日、おばあちゃんの家に行くから。」

学校へ向かいながら、ナナコは言った。

「そっか。泊まってくるの？」

「うん。明日休みだしね。」

そういったナナコの顔を、ヒロエは見れなかった。

いつの間にか伸びた髪の毛が、ナナコの顔を隠していた。

ヒロエはなんとなく、ナナコが最近髪を短くしたことがないな、と思った。

昔は―それはとても昔のこと、まだこの町ですら草原だった時代は―短い髪が太陽の光にちらちらと当たって、ナナコ笑顔によく似合っていた。

「わかった。気をつけて。」
「・・・うん。」

校舎に消えていく姿を目で追いながら、ヒロエは空を見上げた。
どんよりとした梅雨ならではの空。
帰ったらタクトと話をしなければならいかもしれない。

ヒロエは教室へと向かった。
だが、タクトはその日も戻らなかった。

曇天の空。

ヒロエはユウマと屋上で寝そべっていた。
3限目のチャイムが鳴る。

太陽が雲に隠れて、目には程よく明るい。

「一緒に生きてるってどういう感じ？」

ユウマが言った。

「なにが？」

風が二人の間を掠める。

「幼なじみ。」

タクトとナナコの顔が、空に浮かぶ。

「・・・うまく説明できないけど、暖かい感じ。」

ユウマが黙っているの、ヒロエは続けた。

「そこに常に誰かがいて、自分を知っている。どんなに離れていてもいつも同じ場所にいる。いままでも、これから。それが・・・
暖かい」

日差しのような、暖かさ。

「イヤになることないの？」

「どうして？俺は2人のことが好きだよ。失いたくない大切なもの

を、どうしてイヤになることがあるんだ。」

「俺には姉と弟がいるけど、浩衛たちのような関係じゃない。生まれたときから一緒に、血もつながってる。でも、俺にはその存在が苦痛でしかないんだ。時には足かせのように感じる。いなくなってしまうばいいのにも思うよ。俺は一緒に生きるなんて、できない。」

「でもいつしか悠馬にも一緒に生きていく人ができるだろう？」

「さあな。」

ユウマは自嘲気味に笑った。

「俺たちは、そういう関係とは少し違うんだ。俺たちをつないでいるのは血じゃない。“チカラ”なんだ。」

「チカラ？」

「俺たちには“チカラ”があるんだよ。それは持っていても日々の上で何ももたらさない。成績が上がるわけでもない。金持ちになれるわけでもない。願えば、欲しいものがなんでも手に入るわけでもない。そう、人が生まれながらに持っている遺伝子と同じぐらい、なんてこともないごく単純でありふれたものなんだ。だから、一緒に生きていくうえで、実際それは俺たちに必要はない。でも、

“チカラ”があるから、俺たちは一緒にいられるんだ。」

「ふうん・・・じゃあ“チカラ”がなくなってしまうたら？」

ヒロエは言葉に詰まった。

「考えたくもないね。」

彼らは―ヒロエとタクトとナナコは―長い長い年月をともに過ごしてきた。

それは地球と月と太陽のような太古の時間から。

引力のような“チカラ”によって決して離れることもなく。

それはお互いにごく自然なもので。

呼吸をするための酸素のようで。

白い雲と青い空のようで。

とても自然で美しい“チカラ”。

ヒロエはそうやって、長い長い過去を今まで生き、この先にある長い長い未来もまたともに歩むということを、疑いもしていなかった。

「多久兔、いる？」

特進の生徒がヒロエを振り返った。

それは単に好奇心の目というよりも、疑心や、羨望、枯渴した何かを訴えるような目で。

ヒロエはしばらくそんな目を知らない。

特進のクラスは、緊迫した雰囲気だった。

それが自分のせいなのか、もとのせいなのか、ヒロエは考え、そしてすぐにやめた。

「いないけど。」と、ドアのそばにいた男子生徒が答えた。

「今日は、学校に来てないよ。」

いつかタクトの教室に来た特進の生徒が、近づいてきた。

見つめた目の奥に、青白い光を見た。

ヒロエはそれが何かを知っていた。

それを奪い去るには、ヒロエは自分の“チカラ”を持ってすれば簡単だとわかっていた。

それは時折、罨のように感じる、“合図”

黙って、ヒロエは教室を見渡す。

「アイツは、来ないよ。」

男子生徒は、薄笑いを浮かべてそういった。

「多久兔はどこ？」

「さあ、今頃、天国かも。」

今度の“合図”は、明確だった。

男子生徒の眼の奥にある光が、ゆがんだのがわかる。

タクトが静かなる月ならば。
ヒロエが燃え盛る太陽だった。

ダンッ！

騒がしくなる教室。

誰かが、倒れた“彼”のそばに駆け寄る。

名前を呼ぶ。

それを、ヒロエはまるで無声映画のように見ていた。
そして人ごみの隙間から、――それは後ろから2番目、窓から2番目の――タクトの席を見た。

ぽっかりと何かが抜け落ちたような空気のようなだった。

ヒロエは席に近づく。

席に触れると、鉄の冷たい感触が手のひらの感覚に移り、そしてすぐに自分の体温も飲み込んでいった。

椅子は軽く轆くと音が鳴った。

乾いたおとが。

ヒロエはなんだが奇妙な予感がした。

それは、不確か過ぎてヒロエにはつかめない。
そしてタクトを想う。

この場所で、彼はどう過ごしていたんだろう？

家に帰っても、タクトもナナコもいなかった。

静まり返った薄暗い部屋は、ヒロエを奇妙な感覚へと押し込んだ。
それはまるで、暗闇が後ろから覆いかぶさってくるような興奮や、
大波が前方から自分を飲み込む恐怖や、
握り締めたナイフを自分の左胸に突き刺す不安のような。

（そういえば）

ヒロエは思った。

（この“生きてきた”中で――）3人の教室が別れたのは初めてだった。

それは、何億年もかけて作り上げた氷河が、崩れ落ちる音を聞いた
ような感覚が。

「多久兔、いる？」

特進の生徒がヒロエを振り返った。

それは単に好奇心の目というよりも、疑心や、羨望、枯渴した何かを訴えるような目で。

ヒロエはしばらくそんな目を知らない。

特進のクラスは、緊迫した雰囲気だった。

それが自分のせいなのか、もとのせいなのか、ヒロエは考え、そしてすぐにやめた。

「いないけど。」

ドアのそばにいた男子生徒が答えた。

「今日は、学校に来てないよ。」

いつかタクトの教室にきた特進の生徒が、近づいてきた。

見つめた目の奥に、青白い光を見た。

ヒロエはそれが何かを知っていた。

それを奪い去るには、ヒロエは自分の“チカラ”を持ってすれば簡単だとわかっていた。

それは時折、罨のように感じる、“合図”

黙って、ヒロエは教室を見渡す。

「アイツは、来ないよ。」

男子生徒は、薄笑いを浮かべてそういった。

「多久兔はどこ？」

「さあ、今頃、天国かも。」

今度の“合図”は、明確だった。

男子生徒の眼の奥にある光が、ゆがんだのがわかる。

タクトが静かなる月ならば。
ヒロエが燃え盛る太陽だった。

ダンッ！

騒がしくなる教室。

誰かが、倒れた“彼”のそばに駆け寄る。

名前を呼ぶ。

それを、ヒロエはまるで無声映画のように見ていた。

そして人ごみの隙間から、――それは後ろから2番目、窓から2番目の――タクトの席を見た。

ぽっかりと何かが抜け落ちたような空気のようなだった。

ヒロエは席に近づく。

席に触れると、鉄の冷たい感触が手のひらの感覚に移り、そしてすぐに自分の体温も飲み込んでいった。

椅子は軽く轆くと音が鳴った。

乾いたおとが。

ヒロエはなんだが奇妙な予感がした。

それは、不確か過ぎてヒロエにはつかめない。

そしてタクトを想う。

この場所で、彼はどう過ごしていたんだろう？

家に帰っても、タクトもナナコもいなかった。

静まり返った薄暗い部屋は、ヒロエを奇妙な感覚へと押し込んだ。
それはまるで、暗闇が後ろから覆いかぶさってくるような興奮や、

大波が前方から自分を飲み込む恐怖や、握り締めたナイフを自分の左胸に突き刺す不安のような。

（そういえば）

ヒロエは思った。

（この“生きてきた”中で―）3人の教室が別れたのは初めてだった。

それは、何億年もかけて作り上げた氷河が、崩れ落ちる音を聞いたような感覚が。

まだ太陽も顔を出さない暗い朝。

ヒロエは、ベットの横たわっていた。

眠ってはいない。

黙ってそこにじっと身体を横たわらせている。

カチャリ・・・

かすかに玄関が開く音が聞こえた。

ナナコは今日、祖母の家に行くといった。

ヒロエはゆっくりと身体を起こして、足音をさぐる。

それはとてもささやかな音で、耳に入れるのは難しかった。

だが、気配は―長くとともに歩んできた気配は―お互いに隠しようもなく

ヒロエは部屋を出てリビングでその姿を止めた。

そこにタクトが立っていた。

暗闇に慣れた目は

そこにタクトの悲惨な姿をとらえた。

髪が乱れ、着ている服が破れている。

雨音もしないのに、タクトの身体はところどころ濡れて黒ずんでいた。

「多久兔。それは、どういうことだ。」

「起きてたのか。」

「答えてくれ。」

踏み出した足を

差し出した手を

タクトは払いのけた。

そのとき、濡れた手がヒロエに触れた。

それは生暖かく

少々粘り気のある液体だった。

「多久兔？」

ヒロエは首をかしげた。

「七胡は。」

タクトはヒロエの様子に応えなかった。

「七胡は今日むこうに行ってる」

「そうか、朝、そういていたな。」

そういつて、タクトは自分の部屋に入ろうと背を向けた。

「多久兔。“チカラ”を・・・使ったのか？」

タクトは扉にかけた手を止めた。

黙って、ヒロエの言葉を受け止める。

それだけで、ヒロエにとっては十分だった。
そもそも言葉など知らない。

知らないはずなのに、こうも不器用にしかお互いに心を確認できない。

それがもどかしくて、ときに悲しい。

ヒロエはゆっくりとタクトの頬に触れる。

今度はだまって、タクトはされるままになっていた。

頬は、額から流れる黒い液体に染まっていた。

(血が・・・)

ヒロエはそれがタクトの血だと気づく。

まだ、ゆっくりと流れる血の跡を、ヒロエは右の手のひらでゆっくりとなぞっていく。

彼の“それ”をもってして。

淡い光が暗闇の部屋にともる。

タクトの傷跡にそって、頬から頭へ、頭から首へ、首から肩、胸、腹へと伝って―

タクトは目を閉じて、感覚だけでその跡を追いかけているようだった。

「また・・・。」

ヒロエはつぶやく。

その先を言葉にするのも億劫だった。

だが、それは3人の中の合図。

タクトも何も言わなかったが、ヒロエの意図汲み取っていた。

「明日、七胡に言おう・・・。」

ヒロエはそう言ってまたタクトの傷跡を追う。

閉じていたタクトの目は、ヒロエを切なげにみつめていた。

血の臭いが、何かを狂わせる。

タクトが、―世界を行き来する中で―“チカラ”を使い始めたのは、時にゆがみができたときからだ。

生まれ行くときも、死に行くときも。

3人は共に在るべき存在なのに、わずかなズレが生じてきたことにヒロエが気づいたのはごく最近だった。

それは微量な分子ほどのズレ。

ただ、それは確実に不協和音を奏でている。

そして、血が流れたのは初めてだった。

ヒロエには、なぜタクトが“チカラ”を使うのかわからなかった。変わらない日常のはず。

穏やかな日々。

その中でなぜタクトは“チカラ”を使わねばならないのか。

だが、タクトはその理由を決して話さない。

ヒロエは何度も自分の“チカラ”で生じたゆがみを戻そうとした。だが、無駄だった。

ヒロエはゆがんでしまった世界を捨てて

この先に来るであろう未来という世界に飛び込むしかなかった。

それしか、3人を守る術を知らなかった。

だが、世界を進めば進むほど

不協和音は激しくなるばかりのような気がした。

「七胡。」

ヒロエは、祖母の家から帰ってきたナナコを呼び止める。

タクトは部屋から出てこなかった。

「また、“行く”よ。」

「“行く”って・・・少し、早過ぎない？」

ナナコの顔が、不快にゆがむ。

ヒロエは何も応えなかった。

「・・・多久兎は？」

ナナコは応えも待たず、タクトの部屋の扉をたたいた。
返事はない。

眠っているのだろうとヒロエはナナコに言った。

傷を負っていることは告げなかった。

そしてナナコは名残惜しげに視線を残して、自分の部屋へと向かっていった。

『今度は、どれだけ“先”にいくんだろう。』

ナナコがつぶやいた声が、ヒロエの耳に残る。

時の行き先は、3人の誰も知らない。

数ヵ月後のときもあれば、数年後、数十年後のときもあった。

だが決して、過去に戻ることはない。

過去は“変えられない事実”。

ゆがめることのできない、絶対唯一の“真実”。

3人がいくのは未来だけ。

“不毛な荒野”

まだ、誰にも決められていない“自由”な世界。

そして3人に残されるのは、切り取られた『過去』。

“行く”のは、明日の夕方だと、なんの約束事もなく決まっていた。
まるで、習慣のように。

その前に、3人はそれぞれいまの世界ですべきことをする。

それはある種の儀式のようだった。

もう二度と戻らない過去であるがゆえに、

何かを残さずにいられないのかも知れないと、ヒロエは思っていた。

朝、2人の姿はなかった。
何かを求めて、ヒロエはユウマに会いに行った。

その日は日曜日だった。
出かけているかもしれないと望みは小さかったが、ユウマは自宅にいた。

「おう、どうした。」

ユウマは上下灰色のスウェットを着て現れた。
ヒロエの緊張が少し和らぐ。

「ああ。ちょっとな」

ヒロエは短く答えた。

ユウマは少し不思議な顔をした。

だが、それ以上突き詰めることはなく「歩くか」と2人で肩を並べ
そのまま歩き出した。

たわいもない話。

近所の話や、昨夜の映画の話、ユウマの好きなアーティストの話に、
高校の話。

まるで陽だまりのような穏やかな時間。

やがて、思い出したかのようにユウマは言った。

「そういえば、お前、進路どうするんだ。」

「進路……。」

「……進学しないのか。」

「ああ。」

「例の“チカラ”とかのせいかな？」

ヒロエは、それがナナコとタクトのことであると気づいた。

「どうかな。それだけじゃない。」

ヒロエはそういいながら考えた。

『それだけじゃない。』

そう決して。

「俺らには・・・この先どんなミライが来るかわかってるんだ。」

「未来？」

「この先、俺たちはまた再会して、同じ時をすごして、同じ道の上で、同じ命を終える。俺らはそれだけで十分だ。それ以上を望まない。」

ヒロエはふと思いついて、いいや、と続けた。

「・・・いいや、そうなってしまっただけ。それは誰が決めたわけでもないけれど。」

ユウマはしばらく黙っていた。

昼下がりの日差しが、木々の葉の隙間から降りてくる。

やがて公園が見えた。

子供たちが、無邪気に広場を駆け回る。

それをユウマはぼんやりと見て、そして言った。

「・・・よくはわからないけど。それは・・・なんだか・・・」

ユウマは少し言葉を詰まらせる。

ヒロエはだまってその言葉を待った。

「少し、寂しい。」

2人は公園のベンチに腰掛けた。

初夏の日差しは、イチヨウの青々とした葉にさえぎられて、ほどよい暖かさを2人の肌に落とす。

「寂しい？」

ヒロエは繰り返した。

「たぶん、俺が考えている“未来”と、浩衛の考えている“ミライ”は別物だ。それはなんとなくわかる。そして、その先にあるのは、

浩衛と、そして“チカラ”だ。それ以外は何もない。何も望んじやいないかもしれないけれど。オレには、何か望むことをあきらめたように聞こえる。」

「そんなことはない。俺はその“ミライ”を望んでるんだ。この先も、これからも。たとえ・・・過去を犠牲にしても、俺に大切なものはその“チカラ”なんだ。」

ユウマは、少し黙った。ヒロエには、何かをかみしめているように見えた。

「・・・浩衛。お前の言うコレまでの“過去”の中で、同じ事をしてきたのかもしれない。だから俺にはわからない。けど、今の言葉に、俺は傷ついた。」

湿った風が2人の間をすり抜ける。

ユウマの少し汗ばんだ肌をなぞり、ヒロエの柔らかな髪をなでた。同じ風が2人に触れたが、それをどう捕らえたかはお互いに違うのだと、ヒロエは思った。

「そんなことを、言いにくいわけじゃないんだ・・・。」

まるで、子供のようだど、ヒロエは思った。

想いをうまく形にできず、とりあえずのもので相手の理解を得ようとする。

だが、それは結局なにも伝わらなくて、苦みだけが残るインスタントコーヒーを飲んだような感覚に襲われる。

「不安なんだ。」

ヒロエは、率直に言葉にした。

着色もなく、ただ端的に努める。

「今までと違う。七胡も、多久兎も。そして俺自身ですら。」
ユウマは黙っている。

「悠馬。俺が“この日”に、他の誰かと時間を過ごすのは初めてなんだ。今までは3人で、一緒に過ごして終わった日を。俺は何の疑いもなく、朝、この道を来た。それが何を意味するのか、俺は知りたくない。このまま知らないでいれば、この先もきっと同じような道が来る。それならばそれでいいとさえ思える。だけど、どこかで知っている。そうではない意味を。俺は来てしまった。疑問を抱いてしまった。掻き立てられるこれが、“不安”以外の言葉で現されて、もつとうまく伝えられるなら言葉にするさ。だけど・・・俺には思いつかない。」

いつの頃からか、始まってしまったズレは、ヒロエを恐怖に陥れていた。

それは、時限爆弾の入った箱をヒロエに抱えさせた。

（そしてユウマはそれを開けるカギだった。）

取り出したくないものと、それを取り除きたいという葛藤で、ヒロエの身体からは冷えた汗が伝った。

「それは」と、ユウマが言葉を続けようとした。そのとき、耳慣れない音が鳴った。

「悪い。」

ユウマはスウェットのポケットから携帯を取り出した。

青いメタリックな外観に、シルバーの光が点灯する。

ユウマは携帯に出て、一言二言しゃべる。そして、すぐに黙った。

「わかった。」といって電話を切ると、ヒロエに向き合っていた。ユウマの顔が、当惑と不安で青白い。

「多久兔が」

それだけで十分だった。不安がヒロエを覆いつくす。

もと来た道を全速力で走って帰る。

家の扉が開いている。その奥にナナコがうずくまっているのが見えた。

駆け寄る距離が果てしい。

これまでにないほど風景はゆっくりと進む感覚に、ヒロエはいらだった。

「七胡っ」

できる限り冷静に名前をつむいだ。だが、呼吸が乱れてうまくいかない。

外の世界に比べて、玄関は暗い。まるで別世界に迷い込んだ錯覚に襲われる。

ナナコは近づくヒロエに気づいて顔を上げた。幾重もの涙の跡が残っていた。

そして、その跡に続く新たな透明なしづく。

それを止める術をヒロエは探るが、うまい言葉が出てこない。

そしてナナコは静かに泣き続けた。

こんな風なナナコを見るのは、これまでなかった。

「どういうこと・・・多久兔がいなくて…」

「浩衛・・・ごめんなさい。私、止められなくて…」

その言葉だけで、ヒロエの心臓がどくんと波打つ。

「多久兔は・・・どこ」?

電話口での言葉を、聞いてないわけではなかった。

だが、ヒロエは聞いた。

「行っただわ」。

ナナコも同じ言葉を口にした。それが、期待と不安と恐怖をヒロエに与える。

“ミライ” へ？ 一人でなんて無茶だ・・・」

言葉にせずにはいられない。

「いいえ。」

ドクンと心臓が波打つ。

“カコ” へ。」

―それはまるで、暗闇が後ろから覆いかぶさってくるような興奮や、

「私の・・・せいなの。」

―大波が前方から自分を飲み込むや、

「どうして？ 七胡。なぜ・・・。」

―握り締めたナイフを自分の左胸に突き刺す不安のような。

「私が、あんな想いを抱かなければ。」

それは、何億年もかけて作り上げた氷河が、崩れ落ちる音を聞いたような感覚。

『カレハ カコヘナド イキハシナカタ。』

“カコ”

それは“変えられない真実”を示すオト。

口に出しても、その意味が代わることはなく、雪のように静かに大気へと消えていくだけ。

普遍でもう二度と帰れない場所。

「わからない。七胡。なぜ、突然。」

ヒロエは、そう言ったが、心の中で嘲笑した。

“滑稽な自分”

「私のせいなの。私が、この世界に残りたいと望んだから。」

“この先の永久を望んだのは。自分^{ミライ}だけだった。”

目の前が暗い。

『“チカラ”が3人を引き離す』

それはヒロエが、心の奥底に抱いた不安の形。

タクトがカコへ。

それは、“チカラ”の崩壊と、彼との永遠の別れ。

「あんな怪我をして・・・。」
ナナコがつぶやく。

「七胡、知っていたのか」

ヒロエは少し驚いた。

そして、びくりと肩が震えたナナコをみて、ヒロエは自分の声が冷たく沈んでいたことを知った。

ナナコは小さく頷く。

「どう・・・して？」

「今日、多久兔に聞いたの。私は、今日“多久兔”と一緒にいたの。」

「多久兔も、この世界に残りたかったのか。」

ナナコは黙って首を振る。

違うと、繰り替えず言葉が痛い。

「...多久兔は、あなたを守ろうとしていたの。この先、どんな世界へと向かってても、多久兔はあなたの望む世界を守りたがっていた。あなたが好きだったから。だけど私は、“変化”を望んでしまった。でもそれは。永遠に変わらない関係がイヤだったわけじゃないの。」

浩衛。ただ、私は――っ。」

ナナコの瞳から、一筋の光。

「七胡。」

つめたい声だというのは、もうわかっていた。

光は頬を伝い、そして大地へ沈んだ。

「君は、多久兔を愛していたんだね。」

ナナコは何も言わなかった。黙っている。

ただ、寡黙な人形のように動かないでいた。

「ええ。」

これまでの言葉よりも強く。

瞳の中に、彼女の“チカラ”を見た。

「私は、愛していたの。浩衛。彼を愛していたのよ。そして、私が世界をゆがめた。」

そして、タクトは、それを止めるため、戻れない場所へ。

“混沌”

それは決して、ナナコの本来の“ちから”ではなかった。

それは輪廻の中で生まれた新たな力。

慈しみ尊ぶココロの中に生まれた闇のカタチ。

「浩衛。」

ユウマの声に、ヒロエは自分を取り戻した。
そこに現れる感情。

初めて抱く、なんとも醜い。

「多久兔は？」

ユウマが玄関奥のタクトの部屋をのぞく。

そこにはもう何もない。無機質な部屋。

タクトがいたという事実すら、カコは消し去ってしまう。

「いない。多久兔はいつてしまったから……。」

涙ももうでない。乾ききって、心が冷たい。

「行った？どこへ？」

「過去だ。」

「カコ？」

ユウマは繰り返す。

それが、心の中心をえぐる針のように、ヒロエは感じた。

「ああ。」

「どういふ……。」

そしてあたりを見回して、「保住さんは？」と聞いた。

“保住”は、ナナコの、そして彼女の祖母の苗字だったと、ヒロエはぼんやりと思った。

「七胡も、行った。」

「それも、カコに？」

ヒロエはうなずく。力なく。

ユウマはしばらく黙った。

とにかく部屋に入ろうといったユウマの言葉に、まるで子供のよう
に純粹にヒロエは従った。

居間には、3人の使っていた椅子が合ったが、まるでそこに生活感
はない。

夕日が差し込み、不気味な暗さだけがそこにあった。

ヒロエは自分の席へ。ユウマは、向かいの席へ座る。

それは、タクトの席だった。

「・・・多久兎はいやがらせを受けていたよ。」

ユウマは低い声だった。

「ああ・・・」

それに、ヒロエもつられた。

「知ってたのか。」

ユウマは驚いた。

「ああ・・・どうにかしようとするんだ。いつも。でも、無駄に終
わる。」

「いつも？」

「七胡が言った。多久兎は、変えようとしていたんだ。俺たちのミ
ライを。そのために、チカラを使っていた。ゆがみを消すために。」

（それはいつからだったのだろうか。）

ヒロエはできうる限りの記憶をたどる。

それは、イツノトキのものだろうか？

思い出せるのは、ただ季節はずれのあの雪。

ガラスの破片が、雪へと変わっていく美しいさま。

彼の最後の悲しくも美しいチカラのさま。

「よく、わからない。つまり、いやがらせが原因じゃないのか？」
ヒロエは何も答えられなかった。

（ユウマは、嫌がらせを受けたことで、2人がいなくなったとおもっているのだろうか。）

違う。

「俺が、いけないんだ。ゆがみを正せず。結局2人を失った。」

『私、行くわ。』

ナナコの言葉を反復する。

『多久兎を連れて帰ってくる。ミライを戻すの。』

（ナナコ。そんなことをしたら、君までも。）

『浩衛、ごめんなさい。私、彼を愛しているの。彼を、愛しているのよ。』

（俺を1人にしないでくれ。）

『たとえば、私のチカラを失っても。』

（ナナコ！）

『たとえば、戻れなくても。私は、彼と共に。』

（待ってくれ！ナナコ！）

ヒロエの瞳から、また一筋の涙が流れていく。

ユウマはそれを黙ってみていた。そして考えていた。

タクトのことを、ナナコのことを、そしてヒロエのことを。

タクトが嫌がらせを受けるたびに、ナナコが教室を飛び出していったことを、ヒロエは知らなかったのか。

ナナコが、危険を顧みず、タクトを守ろうとしていたことを、なぜヒロエは知らなかったのだろうか。

それは、タクトのわずかな“とまどい”が生んだキセキ。
失いたくないと、願うタクトの想いが風に乗ってヒロエの目を掠めた。

（ヒロエ、俺は、このままお前の望む世界と共に―）

夕闇が訪れようとしていた。

涼しげな風が、どこからともなく入り込んできた。

それを、ヒロエは深呼吸して肺に入れた。

取り交わされる動きを感じて、ヒロエはまだ自分がここにいる意味をといたださずにいられなかった。

「なんで……。」

「え？」

「悠馬は、ここにいるの？」

「ここ？」

「この、世界に。」

ユウマの目には、かすかな西日の太陽が差し込んで、そこに輝きがあった。

ヒロエは言う。

「世界は、決して永久的じゃない。時間軸では永久だけど、生きていく上ではコレは永遠じゃない。この先におこる“ミライ”は、決して保障された世界じゃない。俺は、タクトもナナコも失いたくない。いつか言っただろう。永遠に一緒にいられる“チカラ”を失ってしまうことは、俺には“ミライ”も、世界をも失うことと同じことなんだ。……七胡は、この先にある確かな約束よりも、限られ

た時間の中にある幸せのために。多久兎は、この先にある“ミライ”のために、不確実な物に向かっていった：そして残った俺が、ここにいるのはなぜなんだろう？もう俺のチカラは使えない。二人がいないのだから。」

「浩衛……。」

太陽が沈む。

部屋が暗くなったが、明かりはつけなかった。

徐々に慣れたヒロエの目は、ユウマの輪郭をはっきりとつかんでいた。

「お前のいう“力”は、浩衛、俺にはない。俺はただ、この場所で、この時を生きなきゃいけない。だから、俺の“大切なもの”が、コノ手から離れていってしまつて、失ってしまうのはとてもつらいことだけれど、受け入れなければいけないことだから。言つたろう？俺は、ここから逃げ出せない。たとえば、受け入れられないものがあったとしても。」

「受け入れろということか？」

言葉が沈む。

「お前は、どうしてここにいるんだ？浩衛。」

3人には“チカラ”があつた。それは3人が常に“共に在る”ための“チカラ”。そしてそれは、この先の未来を生きるための。

だが、タクトはその“チカラ”で、過去へ行つてしまった。

そして、そのタクトを追つて、ナナコもまた。

それは、起こることのない奇跡。

それは、もう二度とともに歩むことのない未来。

それは永久の別れ。

“ 別れ ”

「そうか・・・俺も、選んだんだ。」

ヒロエは言う。

「この世界に残ることを。」

それは無意識下での真実。

「どうして？」

ユウマは聞いた。

「お前がここにいたから。」

ユウマという友が。

ユウマは小さく笑う。

それは寂しげだったが。

「ありがとう。浩衛。」

お前の中に俺がいないのが『少し寂しい。』

友として、大切なものに絶対に入らないから、『傷ついた。』

「ずっと・・・一緒だったんだ。」

ヒロエは言った。

「うん。」と、ユウマは答える。

「生れ落ちた場所も。」

「うん。」

「育った時間も。」

「うん。」

「そして、この先のミライも。」

「うん。」

「でも、世界には俺たちだけじゃなかった。」

「うん。」

「世界を一番ゆがめたかったのは俺だったんだ。」

月が出る。

満月が東から昇る。

窓から入る。

タクトと最後に話したときを思い出す。

傷ついたタクト。でも。

「それを罪だというの？」

ユウマは言う。

「・・・いや。」

ヒロエはわかった。

「お前を否定することになる。」

ヒトの欲望は、時に意味もなくそこに横たわり、気がつくとその誰かを傷つける。

タクトがそうであったように。

ナナコがそうであったように。

ただ、それが純粹に欲しいと望むことだからこそ、ヒトは見失い、そしてそれを手にする。

「俺も、望んでいたんだ。3人が苦痛だったわけじゃない。けれど、どこかで俺は、コノ世界に絶望していたのかもしれない。」

毎日流れる不可解な事件。

腐敗した世界。

傷つけあう時代の繰り返し。

それは3人が共に歩んできた時の中で幾度となく繰り返された現実。

「だけれど、希望を手にしたかった。」

この世界は、まだ捨てたものじゃないんだと。

時には血にまみれたこともあった。

ヒトの死に行くさまをこの目に焼き付けたことも。

その先が怖くなって、進み出せないときもあった。

だけれど、選んだ。

そして行き着いた場所は、これまでにないほどの平穏で穏やかな毎日。

そこで選んだ、3人の選んだ道。

「俺は、コノ世界に残ることを望んだーそれが俺の選んだ道だけど、そこにはやっぱり2人を失うことまでのぞんだわけじゃない。」

「どうするんだ？」

「呼び戻す。」

「できるのか？」

ヒロエは寂しげに笑う。

「わからない。でも、やれるだけのことはやるさ。多久兔も、七胡も、きっとそうだった。」

『保住』と書かれた表札を抜ける。

ナナコの祖母は、ヒロエが来るのを待っていた。

祖母は何も言わず、ヒロエを家の中にあげてナナコを“呼んだ”。

何度も

何度も

嗚咽が混じる祖母の声に

ナナコは返事をしなかった。

そして、タクトも。

それは、ゼロに等しい可能性を意味した。

「そうか。」

青い空を見上げながら、ユウマは言った。

学校の屋上は、風が常にやわらかくそこにあった。

「うん。」

傍らに座るヒロエは、答えた。

「生きてるのか？」

「さあ……。カコは……。 “変えられない真実” だから。」

「変えられない、真実。」

「たぶん、2人がいなければ、きっと俺はここにいないよ。」

ユウマはヒロエを見上げた。

ヒロエは笑っている。

それは、決してこの空に似合いのものではないけれど。

「そうか。」

「うん。」

チャイムが鳴る。

遠くで、ヒトの声がする。

それは懐かしい、いつかの日々の。

—完—

8 (後書き)

実は、この原作は私が見た夢なんです。

なんとも不思議で、そして思いのほかはつきりと覚えていたのを形にしたくて書きました。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4918r/>

転生

2011年10月8日20時26分発行